魔王が地上では救世主になっている理由２

神
天界を統べる神。
重度の恋愛脳。
リーゼロッテを恋の達人だと勘違いし、恋愛相談を持ちかける。
バシル
ハイエルフの青年。
リーゼロッテに神獣レヴィアタンの討伐を依頼する。
ミレイア
吸血鬼。親友であるリーゼロッテを魔王にするため、常に策略を練っている。
シュエラン
竜族の少女。魔王選抜ゲーム参加者の一人。
一度リーゼロッテに敗れ、復讐に燃えている。
メイファ
仙狐の少女。魔王選抜ゲーム参加者の一人。
シュエランを誘い、何かを企んでいるようだが……?
イヴ
昔の勇者が造った自動人形。
リーゼロッテを「マスター」と呼び、彼女のために働く。
アルフレート
リーゼロッテの有能な従者。
主が騒動を巻き起こすのを密かに楽しんでいる。
リーゼロッテ
魔王の娘。
次期魔王を決めるゲームに参加中。膨大な魔力を手に入れゲームは順調!
……けれど、ちょっとおバカなのが玉にキズ。
キュー
リーゼロッテの使い魔。
普段は可愛らしい姿だが、とんでもない怪物に変貌することがある。
登場人物紹介
Main Characters

目次

プロローグ　6
第一章　ウルズ編　9
第二章　続・ソルーシア編　111
第三章　ショウザン編　179
エピローグ　279

プロローグ

天使の軍勢に襲われた王都ソルーシアが、魔王の娘リーゼロッテの活躍によって救われてから十日が経つ。

『じゃあまたな～』

間の抜けた声を上げて学院長室の窓から飛び去っていくヤタガラスを見送ると、ミレイアは碧眼の双眸を伏せて小さく溜息を吐いた。心なしか、自慢の銀髪が今はくすんで見える。

彼女のどこか疲れたような様子に、執務机で書類仕事をしているリーゼロッテの従者――アルフレートが首を傾げた。吸血鬼であるミレイアは、滅多なことでは疲労を感じないはずなのだ。

「どうかなさいましたか？」

「どうもこうも……」

ミレイアは先程目にした魔王選抜ゲームの順位を思い出して、静かに瞑目した。

【名前】	リーゼロッテ・シャンツァーラ
【種族】	魔人
【魅力】	**6位**
【魔力】	**1位**
【知力】	**122位**
【財力】	**8位**
【素体】	**4位**
【知名度】	**29位**
【総合評価】	**17位**

友人であるリーゼロッテは、次代の魔王となるべく順調に順位を上げている。

ゲーム開始時は評価項目の全てが低く、総合評価は最下位だった彼女。

しかし「レベル」が異常に上がりやすいことが判明した彼女の魔力値は、それに伴って急上昇し、今や全参加者中トップとなっている。

また地上のヒューマンらを様々な危機から救うことで知名度を上げるなど、他の項目の評価も短期間で急上昇したのだ。

だがそれに満足しているリーゼロッテとは裏腹に、ミレイアは険しい表情で頭を悩ませていた。

「思わぬ収穫はあったものの、結局、賢者の書は外れでしたの……知力の順位を上げる手立てがなくなりましたわ」

魔王になるためには、総合評価で一位をとらねばならない。二位以下では意味がないのだ。だが

知力の順位がこれだけ低くては、一位は狙えない。
しかし、今は打つ手がない。
ミレイアが頭を抱えて考え込んでいると、アルフレートが珍しく助言した。
「……一つだけ、方法がございます」
「それは何ですの？」
縋るような視線を向けたミレイアに、彼は手元の書類に視線を落としたまま答える。
「ミレイア様もご存知のはずですよ？　今回のゲームにも、仙狐の一族の代表者が参加しております」
仙狐と聞いただけで、ミレイアには彼が何を言わんとしているかが分かった。かの種族は長い年月をかけて集めた知識を、古来より受け継がれる秘術によって一族の間で共有しているらしいのだ。
そのあまりに膨大な知識を使いこなせるかどうかは個人の資質次第だが、もし仙狐の秘術を奪えれば、仙狐の一族と知識を共有することになり、知力でもトップに立てるはずだ。
だがその方法は、ミレイアが無意識に除外してしまっていたほどの禁じ手でもある。
「アレだけには、絶対に関わりたくなかったですのに……」
五十の頭をもつヘカトンケイルという魔族を除けば、全魔族中最高の知識量を誇る仙狐の娘。彼女のことを思い出して、ミレイアは苦虫を噛み潰したような表情を浮かべた。

第一章　ウルズ編

つい先日、天使の軍勢に襲われるという未曾有の危機に見舞われた王都ソルーシア。
大きな混乱はあったものの、結局はほとんど被害がなかったせいか、人々の表情に陰りはない。むしろ、以前よりも随分と活気が増していた。
それには、魔法学院からしょっちゅう抜け出しては、街中で騒ぎを起こして学院に連れ戻されるということを繰り返している有名人が大きく影響している。
人々から神使と信じられている彼女の姿を一目見ようと、大陸各地からの観光客が激増しているのだ。
加えて最近のソルーシアでは、目新しくて非常に美味な菓子の数々が大流行していたりする。
ヒューマンの庶民から貴族まで、幅広い層に人気の菓子は、専門店も出来、ソルーシアの名物の一つになっていた。
そうした、連日のお祭り騒ぎを引き起こしている張本人が、魔法学院の院長となった神使ことリーゼロッテだ。
ソルーシアでの滞在が予想以上に長引き、暇を持て余していた彼女は、ある時ついに我慢の限界を迎えた。

「私、空を飛ぶ羽が欲しいわ」
遠い目をして、学院長室の窓から青空を眺めるリーゼロッテ。
彼女は、神族がその背にもつような白い翼を羽ばたかせ、青空を舞う自分の姿を空想していた。
その傍らで事務仕事をしていたミレイアが、リーゼロッテに怪訝そうな視線を向ける。
「いきなり何ですの？」
「羽って自由っぽいじゃない？　今の私に足りないのは自由だと思うの」
「……外に出たいなら、素直にそう言いなさいな」
退屈なあまり年頃の少女にありがちな世迷い言を口にするリーゼロッテに、ミレイアは溜息混じりで言った。
既に王都でやるべき事は全て終えた。後の事は前学院長のルシファーが代行してくれる約束なので、リーゼロッテ達はいつでも次の活動を始められる状態にある。
ゆえに次なる目標である知力順位向上のため、ミレイアが自らの眷属を放ち、仙狐の情報を集めているのだが……
それが予想以上に難航しており、リーゼロッテ達は未だ魔法学院に留まっていた。
リーゼロッテは退屈に耐えかね、時折こっそり学院を抜け出して街に遊びに出掛けている。だが、その度に観光客や街の信者達が騒然となるので、駆け付けたミレイアやソフィーにすぐ連れ戻されていた。
だが最近は脱走回数が急増している。ミレイアは仙狐探しだけでなく、そのことにも頭を悩ませていた。
「そうでなくとも、空を飛ぶ手段は必要だと思うの。飛行能力をもつ相手と戦う時、こっちも空を飛べたほうが何かと便利だわ」
「それもそうですわね……」
羽を使って自由に遊び回りたいがための方便だと分かってはいるものの、確かに一理あると考えたミレイア。
神族だけでなく、魔族にも空を飛べる個体は少なからずいる。それらを相手にする時、こちらも飛べるに越したことはない。
リーゼロッテの要望を叶えてやれば、彼女の不満も少しは発散されるだろう。そんな打算も含みつつ、ミレイアは飛行手段について真剣に考えてみることにする。
その時、ミレイアと同じく事務仕事をしていたアルフレートが口を開いた。
「空を飛ぶ魔道具でよろしければ、背中に装着するタイプのものがございますよ」
「え、そんなのがあるの？」
途端に目を輝かせたリーゼロッテに、アルフレートが頷いてみせる。
「そろそろリーゼロッテ様がそう言い出される頃かと思い、魔界通販で購入しておりました」
魔界通販とは、その名の通り通信販売のことだ。現魔王の使い魔であり、ゲームの案内役を担っているヤタガラスを通じて利用できる。
相変わらず優秀な自分の侍従に、リーゼロッテは満足そうに頷いた。

「そう、さすがね」
「早速、お試しになりますか？」
「ええ、そうしたいわ」
リーゼロッテとアルフレートは立ち上がり、学院長室を後にする。
嫌な予感を覚えたミレイアは、慌てて二人の後を追った。

学院の中庭にやって来たリーゼロッテは、アルフレートから小さな背嚢（はいのう）のような形の魔道具を受け取った。
自身が想像していたものとは全く違った見た目に、彼女は首を傾げる。
「これで空が飛べるのかしら？　羽らしいものは見当たらないけれど……」
「大丈夫でございます。まずは、それを背負ってみて下さい」
リーゼロッテはアルフレートに言われた通り、それを衣服の上に背負う。
するとゆったりとしていた帯が自動的に調整され、リーゼロッテの体にピッタリと合った。
「ここから、どうすればいいのかしら？」
「魔傘（まさん）アイギスを使用するのと同じ要領で、魔道具に魔力を流して下さい」
アルフレートの言葉通り、背中の魔道具に魔力を流してみるリーゼロッテ。
今の彼女の魔力は膨大すぎて加減を間違えれば大変なことになるので、慎重に流していく。すると、魔道具から青白く透き通った光の羽が飛び出した。

二枚の羽から発せられる力により、リーゼロッテの体は軽々と浮き上がる。
飛んでいるというよりは、まるで水の中に浮いているような感じだった。
初めての空中浮揚（ふよう）に喜んだのも束の間、無機質で薄い膜に似た羽を見て、リーゼロッテは不満そうな声を上げる。
「……なんだか、虫の羽みたいね」
「左様でございますか」
学院長室で空想していた白翼とは全く違っていたので、リーゼロッテはもどかしくなった。
「できれば、鳥のような翼が欲しかったのだけれど……」
「申し訳ございません。魔界通販では、そのようなタイプのものは売られていませんでした」
「そう……残念ね」
アルフレートの言葉に落胆したものの、リーゼロッテはすぐに気を取り直した。
考えていたものとは多少違うが、空を飛べることには違いないのである。
リーゼロッテはこれから行う初飛行を思い浮かべ、改めて胸を躍（おど）らせた。
「体は浮いたけれど……どうすれば移動できるのかしら？」
「その魔道具は、魔力を込めれば込めるほど高く浮上できます。また、魔力の流れを変えることで羽を自由に動かせますので、それで飛ぶ方向を調整してみて下さい」
「分かったわ」
アルフレートの説明を聞いて、リーゼロッテは再び慎重に魔力を込めていく。

今までの経験から、考えなしに魔力を込めてしまうと、ろくな事にならないのを彼女は学んでいた。
羽から発せられている力が次第に増し、彼女の体はゆっくりと上昇していく。
やがて王都のどんな建築物よりも高い位置に到達したリーゼロッテは、今度は羽の向きを調整して前方へ飛んでみた。
そして王都周辺の景色を眺めながら、澄んだ空気の中をゆったりと進んでいく。
リーゼロッテは学院長に就任してからずっと苛まれ続けてきた閉塞感から解放されたかのような、爽快な気持ちになっていた。
すっかり機嫌を良くした彼女は、そこでようやく地上で起こっている騒ぎに気づく。
下を見ると、王都中の人々が一様にリーゼロッテを見上げていた。
実はこの時、リーゼロッテがいまいち気に入らなかった背中の羽に、王都のヒューマン達は違った印象を抱いていた。
飛んでいる彼女は気づいていなかったが、魔力で構成された羽からは、青い光の粒が散っている。
それが空に美しい軌跡を描き、並の神族の翼よりもよほど幻想的に見えたのである。
信心深い者は膝をつき、空を舞う神使に祈りを捧げていた。
ご機嫌だったリーゼロッテはそんな人々に手を振っているうちに、少しだけ調子に乗ってしまう。
さらに魔力を込めてもっと速く飛び、王都のヒューマン達に格好いいところを見せようとしたのだ。

彼女は慎重さを忘れて、勢いよく魔力を込める。
すると背中の羽が急激に膨張し――
彼女は、忽然と姿を消した。
王都中の人々が、一斉にどよめく。手を振りながら姿を消したので、彼女が地上に別れを告げて天界に帰ったのだと勘違いしてしまった。
本当は魔力を込めすぎて、消えたように見えるほど急加速しただけだった。だが、それを見抜けるヒューマンは皆無である。
心の拠り所だった神使の消失によって、小さくない混乱が王都中に広がっていく。
神官の中には、王都は神に見捨てられたと泣き叫び、ますます混乱を煽る者までいた。
にわかに暗雲が漂い始めた王都ソルーシア。
思っていた通りの展開になったことに、ミレイアは頭を抱える。
「なんとなく嫌な予感はしていましたわ……リーゼロッテはどこまで行きましたの？」
リーゼロッテの飛行が速すぎて、彼女でさえ途中で見失ってしまっていた。
だからミレイアは、自分よりも遠くまで感知できるであろうアルフレートに問いかける。
「私にも、西に向かったことしか分かりませんね……さすがはリーゼロッテ様です」
主が行方不明になったというのに、実に楽しそうな表情を浮かべるアルフレート。
そんな彼を見て肩を竦めながら、ミレイアは溜息を吐いた。
「リーゼロッテ様なら、すぐにあの魔道具の制御に慣れて、自力で戻って来られることでしょう」

「……だといいのだけれど」
まだ嫌な予感の拭いきれないミレイアは、そう呟く。
とにかく今は、王都中が大混乱に陥っている。そんなリーゼロッテのありがたくない置き土産に対応するべく、ミレイアは動くことにした。

ミレイアの懸念通り、リーゼロッテが王都に帰還するのは一週間後となる。

◇　◇

リーゼロッテの膨大な魔力によって凄まじい速度を出した羽。それは一瞬で彼女をソルーシアから遥か遠く、大陸の西端にまで運んでしまった。
まだその魔道具に慣れておらず止まることすら出来ないリーゼロッテは、進行方向に大きな山があることに気づいて焦る。
彼女は咄嗟に【夜影】というスキルを応用して小さな影を作り出し、その中に手を突っ込む。そして【潜影】というスキルを応用して影の中に収めていた魔傘アイギスを取り出して開いた。
直後、リーゼロッテは山肌に衝突する。
その衝撃は山を盛大に揺るがし、その一角をごっそり吹き飛ばした。
土煙が周囲の森にまで広がり、そこに棲むあらゆる生物の視界を奪う。

唐突に起こった異変に恐れをなし、近場にいた魔物達は全て逃げ出してしまった。
やがて土煙が収まってくると、今度は山に出来た破壊痕の中心地点で、土柱が立ち上る。
魔傘アイギスで作り出した障壁ごと地中に埋もれていたリーゼロッテが、地上に姿を現した。
障壁は、彼女の体を丸く包み込むように展開している。それによって彼女は、衝撃から身を守るだけでなく、舞い上がった土煙をも遮断したのだ。
自らの服に汚れ一つないことを確認して、リーゼロッテは安堵の息を吐く。
衝突の寸前で思いついたことだったが、見事に成功したのである。
やがて視界を遮っていた土煙が晴れると、リーゼロッテは辺りを見回した。
山の下には、見渡す限りの森が広がっている。
その光景を見て、彼女は少し困ったように首を傾げた。
「……ここはどこかしら？」
どうやら、とんでもなく遠くまで来てしまったらしい。彼女はそう認識した。
以前のリーゼロッテなら迷子になっていただろうが、今の彼女は【相同調】というスキルによって使い魔であるキューと意識を同調させられる。それによりキューのいる場所がだいたい分かるので、王都の位置を把握することが出来た。
そうなれば、後は行きと同じように空を飛んで帰れば済む話なのだが……
リーゼロッテの目に、一本の樹木の姿が映る。
その樹木は、今リーゼロッテが立っている山よりも明らかに高かった。

だいぶ距離があるにもかかわらず、それがはっきりと分かってしまうほどに大きいのだ。
沢山の枝を雲に届かんばかりに伸ばし、青々とした葉を繁らせていた。
そのせいで、周囲の森は広範囲にわたって薄暗い影に覆われている。枝葉の隙間から射し込む光の筋が、幾つも地上に降り注いでいた。
壮大な景観を演出するその樹木に、リーゼロッテは強く興味を惹かれる。
「……ちょっとだけならいいわよね」
彼女は自分に言い聞かせるように呟いた。
今王都に帰ったところで、待っているのは退屈な時間だけだ。
どうせなら、自らの好奇心を満たし、時間を潰してから帰ろう。
そう決めると、リーゼロッテは殊更ゆっくりとした歩みで巨大な樹木に向かった。

◇　◇

ずっと魔法学院の中にいたせいか、久しぶりに歩く外の森は、やけに綺麗に見えた。
森には濃密な植物の匂いが充満しており、それもまた不思議と心を落ち着かせてくれるようで、実に気分がいいのである。
長い引き籠もり生活で少し感覚が鈍っていた彼女は、森に潜む違和感に気づかない。
ヒューマンでさえ、この森に足を踏み入れれば神聖な雰囲気を感じ取り、畏怖を抱いていたこと

だろう。
いつも以上に、妙な鈍感さを発揮するリーゼロッテ。
だがそんな彼女も、件の樹木にかなり近づいた所で、何者かが張った結界を通り過ぎたことに気がついた。
「そこのヒューマン、止まれっ！」
すぐさま、鋭い男の声が森の奥から響く。
リーゼロッテは立ち止まって周囲を見渡してみたが、ヒューマンはおろか、声の主も見当たらなかった。
魔人の超感覚は、ヒューマンの感覚を遥かに上回る。それをもってさえ彼の位置を探ることが出来ず、彼女は不思議そうに首を傾げる。
魔法の気配は感じないので、恐らくはスキルで姿を隠しているのだろう。
リーゼロッテは今の声が誰にかけられたものなのか疑問に思いつつも、再び歩き始めた。
すると、今度は若干慌てた感じの声が、再びリーゼロッテの耳に届く。
「だから、止まれと言ってるだろう！　それ以上進めば攻撃するっ！」
「……もしかして、私に言っているのかしら？」
「そうだ！　死にたくなければ歩みを止めろ！」
リーゼロッテの独り言のような呟きを、男はしっかり聞き取って応答した。
どうやら、随分と耳の良い男であるらしい。

リーゼロッテはとりあえず、男の警告通りに立ち止まった。
「それで、私に何の用かしら？」
「何故ヒューマンがこのような場所にいるのかは知らないが……ここから先の領域に入ることは許さない。今すぐ立ち去れ！」
姿を見せないまま、男が有無を言わせぬ口調で言う。
もし警告を無視すればどうなるのかを、彼は濃厚な殺気を放つことでリーゼロッテに示しているのだ。
彼女が一歩でも足を進めようものなら、本当に殺すつもりのようだ。
リーゼロッテがヒューマンだったならば、素直に引き返していただろう。
だが彼女は魔族である。
そしてそれ以前に、赤の他人の言葉を素直に聞くような性格ではなかった。
「嫌よ」
「なんだと？」
あっさりと拒絶され、男は困惑した声を上げる。
もしかしたら、警告を無視したのは自分が初めてだったのかもしれないと、リーゼロッテは考えた。
「あなたの言葉に従う理由がないもの。私は、あっちに見える大きな木に興味があるの」
「……お前、あれが見えるのか？」

「ええ、普通に見えるけれど？」
「――っ！　すまないが、生かして帰すわけにはいかなくなった」
どうやらリーゼロッテは、地雷を踏んだらしい。
森の奥から放たれる殺気が、一気に鋭くなった。
直後、何かが空気を切り裂き飛来する音を、魔人の優れた聴覚でとらえる。
リーゼロッテは一瞬で魔力を練り上げて体を強化し、三本の矢が彼女にとっては遅すぎる速度で飛んでくるのを視界に収めた。
三本のうち二本は同時に射出されたらしく、どちらも真っ直ぐ彼女に向かっている。
残りの一本は空に向かって打ち上げられたようで、放物線を描いてリーゼロッテの頭上に落ちてきた。
一本目を避けても二本目が、二本目を避けても三本目が、標的を襲うように計算された見事な攻撃である。
ヒューマンならば、簡単に射殺されてしまっただろう。
だが残念なことに、魔族にはあまりにも遅すぎた。
リーゼロッテは迫る矢を避けもせず、一本ずつ片手で掴み取ってみせる。
「なっ!?」
一瞬のうちに行われた絶技を見て、男は驚愕（きょうがく）の声を上げた。
さらには特殊な材質で作られ決して折れないはずの矢を、リーゼロッテが平然と折ってしまった

ので、彼は追撃を忘れて絶句する。
攻撃が止んだことを疑問に思いつつも、リーゼロッテは隠れている男にはっきり聞こえるよう、大きな声で名乗った。
「私、リーゼロッテ・シャンツァーラっていうの。よく覚えておいてね」
「……？　一体何を？」
彼女の唐突な自己紹介に、男が戸惑った気配がする。
彼の問いには答えず、リーゼロッテは矢が飛んできた方角と速度から計算した相手の位置へと移動する。
男の目には、彼女が唐突に姿を消したように見えた。
実際は彼が視認できないほどの速度で動き、音もなくその背後を取ったのだ。
男が隠れている茂みの後ろに立ったリーゼロッテは、魔傘アイギスを振り上げる。
だが彼の姿を見て攻撃の手を止め、興味深げな声を漏らした。
「……エルフ？」
「――!?」
男は背後のリーゼロッテに気づき、慌てて大きく飛び退く。
彼は長く艶やかな金髪をもつ、見目麗しい青年だった。若草色をした一枚の布を体に巻きつけただけという格好で、いかにも森の住人といった雰囲気を醸し出している。
エルフの特徴である長く尖った耳をもっているのだが、王都で見かけるエルフとは何か違うものを感じて、リーゼロッテは興味をもった。
「あなたは何者なのかしら？」
「お、お前は何者だ!?」
同じ疑問が、両者の口から同時に発せられた。
互いに顔を見合わせた後、一拍置いて男が先に口を開いた。
「……リーゼロッテといったな。お前は、本当にヒューマンなのか？」
「違うわ」
リーゼロッテが否定すると、何故か男の顔に喜色が浮かぶ。
「ま、まさか神族――」
「それも違うわ」
さらに否定され、一転して怪訝そうな顔をする男。
だがリーゼロッテが次に発した言葉に、彼は目を見開いた。
「私は魔族よ」
彼女が自らを指し示してそう言うと、男は手にしていた武器を取り落とす。
恐怖のあまり平伏するか逃げ出すだろうと予想したリーゼロッテだったが、男は若干違う反応を示した。
「魔族だと？」
「そうよ」

「ほ、本当に魔族なのか？」
「ええ、嘘ではないわ」
リーゼロッテが重ねて言うと、男はしばし呆然とする。
それを見てリーゼロッテが首を傾げた瞬間、彼は突然平伏して頭を地面に擦りつけた。
「頼む！　助けてくれ！」
「……え？」
予想していなかった展開になり、リーゼロッテは頭に疑問符を幾つも浮かべた。

◇　◇

リーゼロッテに救いを求めた男の名前はバシルというらしい。
エルフによく似た外見だが、ハイエルフという名の種族なのだそうだ。
彼曰く、件の巨大な樹木は〈世界樹〉と呼ばれており、そこにハイエルフが住む集落があるという。
つい先程までリーゼロッテの行く手を阻んでいたバシルが、彼女をそのウルズという集落に案内してくれることとなった。
リーゼロッテは、バシルがハイエルフだと聞いて納得した。
「そう、どうりで普通のエルフとは違うと思ったわ」

「そうなのか？」
彼女の言葉に、バシルが意外そうな声を上げる。
ハイエルフとエルフの違いは住んでいる場所が違うことくらいしか知らないと言う彼。
リーゼロッテは頭に疑問符を浮かべた。
「おかしいわね……私はあなたに、エルフとは明確に違う何かを感じるのだけれど」
「ふむ？　ああ、そういえばエルフよりも、ハイエルフのほうが若干魔力が大きいと聞いたことがあるな……そのせいじゃないのか？」
バシルの言葉に、リーゼロッテは顎に指を添えて考え込む。
だが、幾ら考えても何が違うのか分からず、すぐに諦めた。
「まあ、実際にエルフに会ったことはないのだが……」
彼がこの森でヒューマン以外の他種族に遭遇したのは今回が初めてらしい。
ヒューマンは時々迷い込んでくるそうだが、それも姿を見たのはせいぜい数人程度。
さらに、バシルはこの森から出たことがないという。
彼だけでなく、ハイエルフは彼ら自身が聖域と定めている〈世界樹〉付近の森から、誰も外に出たことがないそうだ。
他の種族が聖域に入ることを拒み、また自分達が聖域から出ることも忌避する種族。
だから魔族や神族に関する伝承も、千年以上前のものしか残っていないらしい。
彼のそんな説明を聞いて、リーゼロッテはまた首を傾げる。

「……千年以上？　五百年前には、魔族は誰も来なかったのかしら？」
「ん？　ああ、魔族が来たという話は聞いたことがないな。もしかしたら、当時のハイエルフが追い払った者達の中にいたのかもしれないが」
「そう……」
エルフの寿命はヒューマンより長いが、せいぜい三百年程度である。
ハイエルフも同様だとすれば、バシルが当時のことを知らないのは当然だ。それでも五百年前に魔族が来たとしたら、話ぐらいは残っていそうなものだが……
リーゼロッテが興味を惹かれてここまで来たように、あの〈世界樹〉とやらは好奇心旺盛な魔族なら、必ずや近くで見てみたいと思うだろう。
だから前回の魔王選抜ゲームに参加していた魔族らが、一人もやって来なかったというのは不自然に思えた。
だがバシルは、魔族のことをあまり聞かされていないようだ。
彼がリーゼロッテに助けを求めたのも、魔族を恐れていないからだろう。
魔族とは魔界に住む種族の総称で、地上に住む種族より強い――バシルにはそのくらいの認識しかないらしい。
と、そこでリーゼロッテは、彼から肝心なことを聞いていなかったと気づいた。
「それで、あなたは私に何をして欲しいのかしら？」
「……神族や魔族は、地上に住む種族を遥かに超える力をもつと聞く。その力を見込んで、お前に

退治してもらいたい奴がいるんだ」
バシルによれば、〈世界樹〉の下にある大きな泉にレヴィアタンと呼ばれる神獣がいるという。彼はそれを倒したいのだそうだ。
神獣とは、神族が創造した使い魔のことである。魔族が創造した魔物とは違い、地上ではあまり見られない。だが稀に見られる個体は非常に強力な場合が多い。それは魔物を使い捨てにすることが多い魔族と違って、自尊心の強い神族は自らの眷属である使い魔の強化に熱を入れるからしい。
リーゼロッテとしては、それがバシルだけでなく他のハイエルフ達にとっても迷惑な存在であるのなら、協力してやってもいい。
話を聞く限りハイエルフの数は少なそうだが、多少なりとも知名度は上がるだろう。
だが、彼がその打ち倒すべき敵を神獣と称していることに違和感がある。リーゼロッテは思わず怪訝な表情を浮かべた。
それを難色と見なしたのか、バシルが焦った様子で言葉を続ける。
「頼む、ちゃんと礼もする！　俺の家系に伝わる賢者のサークレットを――」
「待って」
何だか妙に聞き覚えのある響きだったので、リーゼロッテは思わず口を挟んだ。
「そのサークレットは装備したら頭が良くなるとか、そういうものかしら？」
「あ、ああ。そうだ」
リーゼロッテの疑わしげな視線に戸惑った様子を見せつつも、バシルが肯定する。

「……誰かのポエムが収録されてたりは？」
「――？　そういう話は聞いたことがないな」
「……」
魔法学院に長らく封じられていたアレに名前が似ているのは気のせいかもしれない、とリーゼロッテは思い直す。
もし本当に頭が良くなるのなら、知力評価を上げるため是非とも手に入れておきたい。
いまいち意欲の湧かなかったリーゼロッテは、俄然やる気になった。

小さな集落に引き籠もっている、数の少ない種族。
それが、バシルの話から彼女が思い描いたハイエルフのイメージである。
だが〈世界樹〉を目の前にした時、リーゼロッテは自分のイメージが間違っていたことを思い知らされた。
付近にある山々よりも高く、雲の上にまで葉を広げる巨大な樹木。
その幹や太い枝の内部で、無数のハイエルフ達が生活を営んでいる様子が見えたのだ。
〈世界樹〉の内部に穴を開けてハイエルフ達が住める空間を作り、幹を階段状に削ることで、上下の移動をしやすくしているようである。
まるで巨大な塔のような木の隅々まで、大勢のハイエルフ達が騒々しく行き交っていた。
そこに住むハイエルフの数は、アズメルト王国の王都ソルーシアの人口を遥かに超えている。服装こそ原始的だが、生活に必要な設備の充実度も負けていないようだった。
そんな魔改造された樹木を見て、リーゼロッテが不思議そうな声を上げた。
「……〈世界樹〉にあんなに手を加えてしまっていいの？」
「さあ？　俺が産まれた頃には、すでにあんな感じだったからな」
「そう」
聖域と定めているにしては、その中心にある〈世界樹〉を随分ぞんざいに扱っている。
ハイエルフがもつスキルは植物と相性がよいので、あの〈世界樹〉に築かれた住居は彼らにとって住みやすいらしいのだ。
ハイエルフ達の集落を物珍しげに眺めていたリーゼロッテは、そこでふとバシルが聖域に近づく者を追い払っていたことを思い出す。
「そういえば、私はこのまま中に入っても大丈夫なのかしら？」
「たしかにそのままじゃ、まずいだろうな」
バシルはそう言うと、懐からハイエルフの耳を模して作られた奇妙な道具を取り出し、リーゼロッテに手渡した。
「これは何？」
「変装道具だ。それを着けていれば、大概の相手にはバレない」
「そんなものかしら？」
リーゼロッテは少し疑問に思いつつも、彼から渡されたそれを自身の耳に被せた。

ハイエルフは容姿が非常に整っているので、恐らくは普通のヒューマンが付け耳をしたところで違和感は拭えなかっただろう。
だがリーゼロッテの容姿であれば、何の問題もないようだ。
「ほう、耳が普通であれば綺麗なのだな、お前は」
「……その価値観はよく分からないわ」
容姿を褒められたことに若干照れつつも、どこか釈然としないものを感じるリーゼロッテ。
後から詳しく聞いたところ、ハイエルフにとって耳が尖っていないのは、ヒューマンにとって目や鼻の形が奇妙に見えているぐらいの違和感があるらしい。
「こんな物を用意していたという事は、元から外部の者を招き入れるつもりだったのかしら？」
「う……」
リーゼロッテの指摘に言葉を詰まらせるバシル。
だが彼女から問うような視線を向けられると、彼はあっさり白状した。
「そう」
「森で力の強い者と遭遇したら、片っ端から協力を要請するつもりだったんだ」
彼はウルズ周辺の森を巡回して侵入者を警戒しつつ、協力者を探してもいたようだ。
たとえ相手が神族や魔族でなくても、誰かに助けを求めるつもりでいたという。
彼はそれほど追い詰められているのだろう。
だがここで、リーゼロッテは彼の話にきな臭いものを感じた。

彼の言うレヴィアタンという神獣。
それがハイエルフに害を為す存在で、彼らの手には負えないほど強力だと仮定する。
だがそれにしては、〈世界樹〉に住むハイエルフ達は平穏に暮らしているように見えるのだ。
そんな彼女の疑念は、バシルの案内でウルズに足を踏み入れると、ますます深くなった。
〈世界樹〉の真下にある広大な泉。
そこから地震のような激しい地響きと共に、何かが這い上がってくる気配がしたのだ。
するとハイエルフ達が騒然となり、リーゼロッテ達のいる〈世界樹〉の下層へ急いで集まってくる。
直後、泉の中から飛び出してきたのは四肢のない細長い体をもち、口には大きくて鋭い歯が並んだ使い魔だった。
「キシャアアアアアアアアアアアアアアアア」
使い魔は大きく口を開け、盛大に咆哮する。
それは、リーゼロッテが想像していたよりも遥かに巨大な体をしていた。
頭部だけでも、ソルーシアの王城に匹敵する大きさである。
何にせよ、あれが件のレヴィアタンなのだろう。
体表は青く輝く鱗に覆われており、いかにも神獣らしい厳かな雰囲気を漂わせている。だが、その姿はあまりに巨大で恐ろしげだった。
そんな怪物の登場に、さぞやハイエルフ達はパニックになるだろう……と思いきや、彼らは一斉

に静まり返り、レヴィアタンに向かって祈りを捧げ始めたのである。
レヴィアタンのほうも、ハイエルフ達をただ眺めるだけで、襲いかかろうとする素振りは見られない。
その様子を見て、リーゼロッテがバシルに胡乱な目を向けた。
「あれは、どういうことかしら？」
「……色々と事情があるんだ」
彼は苦虫を噛み潰したような顔で、レヴィアタンを崇めるハイエルフ達を見ている。
「そう。まずは、その事情とやらを聞かせて欲しいわね」
「ああ、分かってる」
バシルの説明は、彼の家で行われることになった。

◇　◇

リーゼロッテが案内されたバシルの住居は〈世界樹〉の比較的上層階にあった。
家族を早くに亡くしているため、今は一人暮らしとのことだ。
彼が言うには、住む場所の高さはハイエルフの中での地位の高さに比例するらしい。
つまりバシルの身分は、それなりに高いということになる。
ならば彼が家でご馳走してくれるという夕飯は、さぞかし豪華なのだろう。

レヴィアタンについての事情を聞き終えたリーゼロッテはそう思い、期待で胸を膨らませていたのだが……
「……これは何かしら？」
机の上に置かれた一枚の大きな葉を見て、リーゼロッテは思わずそう呟いた。
「何って……夕飯だ」
「この葉っぱが？」
「そうだ」
真顔で頷くバシル。
リーゼロッテは信じられないものを見るような目で彼を見つめた。
バシルはそんな彼女の様子に首を傾げていたものの、やがて何かに気づいて苦笑する。
「ああ、別に遠慮せず食べてくれていいんだ。確かにそれは上層で採れた高級葉だが……俺はそれなりに裕福だから、懐も大して痛まない。お前には危ないことを頼むのだから、これぐらいは当然だ」
「……そう」
どうやらバシルは、出された食事が豪華すぎてリーゼロッテが遠慮していると思ったらしい。
言動から察するに、彼なりに客人をもてなそうと奮発したようだ。
しかしリーゼロッテには、どう見ても美味しそうには思えなかった。
（そういえば、エルフは菜食を好むと聞いたことがあるけど……）

実際は、学院に通っているエルフ達も普通に肉類を食べているのだが、リーゼロッテはそのことを知らない。
彼女は、エルフとは肉を嫌い、野菜しか食べない種族だと未だに思い込んでいたのだ。
一応、目の前に置かれた〈世界樹〉の葉も、野菜と思えば食べ物に見えないこともない。
だがそれでもリーゼロッテは、その葉を口に入れるのをためらってしまう。
魔人である彼女は、何を食べようともお腹を壊すことはない。だが、味覚は普通にあるのだ。不味いものはなるべく食べたくない。それに何より、〈世界樹〉の葉はとてつもなく臭かった。
見た目が突飛な食材は魔界にも沢山あるし、リーゼロッテは初めて見るものも物怖じせず食べるほうだ。だが、そんな彼女が食べるのを躊躇するほどに、〈世界樹〉の葉は酷い臭いを発しているのである。
リーゼロッテが葉を凝視したまま固まっていると、先にバシルが自らの分の葉を両手に持ってかぶりついた。
じっくりと咀嚼して呑み込んだ後、彼は表情を綻ばせる。
「うむ、美味い」
「え、本当に？」
「ああ、お前も食べてみるといい」
その言葉通り、実に美味しそうに食べ進めていくバシル。
そんな彼の様子を見ているうちに、リーゼロッテにもだんだん〈世界樹〉の葉が美味しそうに見

えてきた。
ゴクリと唾を呑むと、彼女も葉を手に持って恐る恐る齧り付く。
シャリッと、新鮮な野菜を噛んだ時のような音が鳴った。
次の瞬間、口の中に広がった味に、リーゼロッテは思わず顔を俯かせ、肩を震わせる。
彼女の反応を感動の表れだと解釈したバシルは、得意気な顔をして頷いた。
「どうだ？　これほど美味いものは食べた事がないだろう？　〈世界樹〉の葉はここでしか採れないからな」
リーゼロッテには、彼の地元自慢に応じる余裕がなかった。
それほどに凄まじい味が、彼女を苛んでいたのだ。
ヒューマンなら、一瞬で気絶してしまいそうなほどの刺激的な味。老人が誤って口にすれば、ショック死する恐れがあるだろう。
いや、もしかしたら魔族でも、弱い個体なら気を失っていたかもしれない。
要するに、リーゼロッテにとって〈世界樹〉の葉は死ぬほど不味かったのだ。
「しかもこれは高級品だからな。風味も格別だし、後味も最高だ」
バシルの言葉を聞きながら、しつこく残る生臭さと苦味に涙を浮かべるリーゼロッテ。
そんな彼女を、バシルは不憫そうに見た。
「ふむ、泣くほど美味しかったか……外の世界の食事とは、それほどに酷いものなのか？」
「……」

いや、魔界でもここまで酷いものを口にしたことはない――と言いたかったが、未だ口の中に残り続ける味に耐えるのが精一杯で、リーゼロッテは言葉を発することができない。
黙り込んでしまった彼女を見て、バシルは自らが手にした〈世界樹〉の葉を名残惜しそうに眺めた後、ゆっくりと口を開いた。
「よかったら、俺の分も食べるといい。良い思い出になるだろう」
そう言って、自らの分の葉を差し出すバシル。
普通の状況ならば、ここで彼の優しさを感じるのかもしれないが……
今のリーゼロッテは、ニコニコしながら葉を突き出してくるバシルが憎くてしょうがなかった。
口の中の苦味が収まったらどんな方法でなぶり殺してやろうかと、物騒なことを考え始める。
だがそこで、ふとあることに気がつき、バシルへの殺意は霧散する。
唐突にステータスカードを取り出した彼女を見て、知らず知らず命拾いしたバシルが首を傾げた。
「……？　どうした？」
「いえ、なんでもないわ」
そう言いつつ、リーゼロッテは手元に残った〈世界樹〉の葉に視線を落とす。
なんとそれを食べる前より、マナの値が上昇していたのだ。
マナとは太陽の光に含まれ、地上に住む者の魂に少しずつ蓄積されるものだ。魔王選抜ゲームの参加者達は地上に住む種族や魔物を殺し、その魂からマナを吸収することで、レベルを上げられる。
何者かを殺した時に得られる量に比べれば、今回得られたマナは微々たるものだった。だがハイエルフの寿命は長いので、毎日食べていればそこそこのレベルになるだろう。
リーゼロッテは、ハイエルフの魔力がエルフに比べて高いというのは、この〈世界樹〉の葉を食べているためではないかと思い至った。
そしてバシルの家に来るまでに見た様々なものを思い出し、彼女の中で一つの推論ができ上がる。
「バシルはいる？」
突然訪問してきた女性の声によって、リーゼロッテの思考は一時中断させられることとなった。
入り口から姿を現したのは、腰まで届く長い金髪をもち、少し目尻が下がった柔らかい印象の少女だ。長身ですらりとしているが、出るところは出ている。女性ならば誰もが羨(うらや)みそうな体型をしていた。
服装も他のハイエルフと同じく素朴で地味なものなのに、その優れた肢体のおかげで幾分か華やかに見える。
彼女はリーゼロッテと目が合うと、困ったような笑みを浮かべた。
「ふふ、バシルも隅に置けないね。こんなに可愛い恋人、どこで見つけて来たの？」
「い、いや！　これは違うんだ！」
彼女の言葉に、焦ったような声を上げて立ち上がるバシル。
そんな彼を無視して、少女はリーゼロッテに声をかけた。
「こんばんは、私メリーナっていうの。よろしく」
「リーゼロッテ・シャンツァーラよ」

自己紹介をし、握手を求めてきたメリーナに、リーゼロッテは素直に応じる。
その手を離すと、メリーナはどこか悪戯っぽい微笑みを浮かべた。
「彼、ちょっと頼りなくて間抜けなところもあるけど、優しくていい人よ。大切にしてあげてね」
「メリーナ、彼女はそういうのではなくてだな……」
バシルがリーゼロッテとの関係について弁明しようとするが、メリーナは聞く耳をもたない。
「バシル、別に隠さなくたっていいんだよ？」
「メ、メリーナ……」
「だって……ねえ？」
メリーナは、リーゼロッテに同意を求めるように声をかけた。
彼女曰く、バシルは幼馴染みであるメリーナ以外の女性を家に入れたことがないらしい。そしてバシルのことをよく知るメリーナには、リーゼロッテが彼の親戚などでないことは分かる。
血の繋がりがない女性を夜に招き入れ、あまつさえめったに食べられないほど高級な食事を振る舞っているのだ。二人は特別な関係にあると考えるのが自然だろう。
しかも彼は、大好物である食べかけの〈世界樹〉の葉を、今まさにリーゼロッテに譲ろうとしていたのである。
それらをメリーナに指摘され、バシルは面白いほど顔を青くした。
「おめでとう、バシル」
「ほ、本当に違うんだメリーナ……」

必死に弁明しようとするバシルに対し、微笑んで祝福の言葉を口にするメリーナ。
だがリーゼロッテは、メリーナはわざと誤解したように振る舞って、バシルをからかっているのではないかとなんとなく思った。
まるでバシルの慌てる様子を見て、彼の気持ちを確かめているような――そんな甘酸っぱい何かを、メリーナから感じる。
恐らくは二人共、お互いの気持ちに気づいているのだろう。
だが、とある現実が足枷となって、互いにその想いを口にできずにいるらしい。

一見、全く陰を感じさせない明るい態度でバシルと接する、メリーナという少女。
この家に案内された直後にバシルから聞いた話が本当ならば、彼女こそが数日後、レヴィアタンに生け贄として捧げられる予定の女性だった。

◇　◇

レヴィアタンの討伐は、ハイエルフ達が寝静まった深夜に行うこととなった。
予定の時刻となり、リーゼロッテはバシルに先導され、〈世界樹〉の最下層にある儀式の間へ向かう。そこは、ハイエルフ達が神獣と接触を図る際に使用する場所だという。
空が〈世界樹〉の葉に覆われているせいか、月明かりはほとんど届かず、ウルズ全体が深い闇に

包まれていた。
レヴィアタンを倒してしまうまでは誰にも気取られたくないとバシルが言うので、二人共明かりの類は持っていない。
あらゆるものを覆い隠してしまう闇の中を、バシルは迷わず進んで行く。
この日のために、彼は儀式の間への道順を完璧に記憶したらしい。さらには、戦いに備えて様々な装備も用意したそうだ。
元から闇を見通せる目をもつリーゼロッテは、そんなバシルに付いていく。
足音を立てぬよう気を配りながら〈世界樹〉の最下層まで来ると、魔法の照明によって照らされている大きな扉が見えてきた。
そこで一旦、リーゼロッテ達は立ち止まる。そして物陰に隠れ、儀式の間へ続いているらしい扉に視線を送った。
扉の両脇には、見張りらしい二人の男が立っていた。
神聖な場所である儀式の間に普段は侵入しようとする者などいないのだろう。
見張りの男達は眠たげな表情を浮かべており、明らかに気が抜けている。
そんな二人に向け、バシルは予め痺れ薬を塗っておいた矢を射ようとしたが……先にリーゼロッテが動いた。
見張りの男達が視界に入ったと同時に【影操作】を発動し、影を男達の背後にこっそり忍ばせていたのだ。

暗がりを利用して回り込んでいた彼女の影は、二人の不意を突くことにあっさりと成功する。
そして【影操作】で作り出された拳で男達を殴り、昏倒させてしまった。
ハイエルフの中でもそれなりに強い者だったらしい彼らを一瞬で倒したリーゼロッテに、バシルは感心する。
「見事な手際だ……さすがだな」
「そう」
内心で照れつつも、澄ました表情を保つリーゼロッテ。
そうして思っていたよりも簡単に、儀式の間への侵入に成功した。
リーゼロッテ達が扉から延びる通路を進むと、その先にはドーム状に造られた巨大な空間があった。
ハイエルフ達が儀式の間と呼ぶその空間には、奥の水場とそのそばにある祭壇らしきもの以外は何もない。
そこは〈世界樹〉の根の部分の中で、水場はレヴィアタンが棲む泉の一部であるようだ。
恐らくは、そこからレヴィアタンが顔を出すのだろう。
後はバシルがレヴィアタンを呼び出し、リーゼロッテが退治すればいい。
レヴィアタンを呼び出すには、ハイエルフに代々伝わる特殊な魔法陣を描く必要があるそうだ。
バシルは少しも躊躇することなく、レヴィアタンを誘い出す準備を始める。
そんな彼の背中を見て、リーゼロッテはバシルの家で聞いた話を思い出した。

レヴィアタンを呼び出してしまえば、もう後戻りは出来ないだろう。
その後で尻込みされても迷惑だ。
だから彼女は、念のためバシルに尋ねた。
「本当に、あなたはこれでいいのかしら？」
その言葉だけでリーゼロッテの言いたいことを十分に理解したバシルは、一旦作業を止めて彼女を振り返る。
「ああ、大丈夫だ。お前こそ、こんな事を頼んでしまってすまないな……」
「私は知名度さえ上がれば、それが悪名によるものでも別に構わないもの」
二人で話し合った結果、リーゼロッテがレヴィアタンを屠り、それをバシルがハイエルフ達に仰々しく喧伝する手筈になっていた。
ハイエルフ達が崇める神獣を殺せば、彼らにとってリーゼロッテの名は忘れられないものとなるだろう。
さらに、知力を上げることができそうな賢者のサークレットという報酬までもらえるのだ。リーゼロッテとしては何も文句はなかった。
問題があるとすれば、レヴィアタンが存外に強そうなことである。
バシル曰く、レヴィアタンは水を司る力をもっており、水場では凄まじい強さを発揮するそうだ。
それだけでなく、あの青く輝く鱗はあらゆる魔法を弾いてしまう上に、どんなに強力な斬撃や打撃をもってしても傷一つ付けられないほど硬いのだとか。

特に魔法が効かないかもしれないというのは、魔法を得意とするリーゼロッテにとってやりにくかった。
だからといって、負ける気は全くしないのだが。
バシルは色々と対策を練っているらしいが、あまり当てにしていない。
「それにしても……あなたって、とても魔族好みの性格をしているわ」
「そうなのか？」
「ええ、特にアルフレートあたりが気に入りそう」
「……？」
彼女の言葉に首を傾げながら、やがてバシルは祭壇にて魔法陣の構築を終えた。
そしていよいよレヴィアタンを呼び出すべく、その魔法陣に魔力を込めようとしたが……
突如、それを制止する声が儀式の間に響いた。
「やめてバシル！」
思わぬ人物の声に驚き、バシルは手を止めてしまう。
それは、彼が最もよく知る人物の声であった。
「メリーナ……何故ここに？」
バシルが振り返ると、幼馴染みであるメリーナが儀式の間の入り口に立っていた。
その問いには答えず、メリーナは申し訳なさそうな顔でリーゼロッテを見た。
「リーゼロッテさん、あなたって本当はハイエルフじゃないよね？」

「ええ、そうよ。よく分かったわね」
「ごめんなさい、握手をした時に私のスキルで……」
「そう」
リーゼロッテは、彼女と会った時に握手を求められたことを思い出した。
どうやらメリーナは、直接触れた相手から何らかの情報を得ることができるらしい。
最初は、想い人のそばに突然現れた女性を見て動揺し、彼との関係を探ろうとしたのだろう。だが思いがけずリーゼロッテがハイエルフでないことを知った。その後、バシルが何を考えているのかに気づいたようだ。
戸惑うバシルの姿を映した瞳を揺らしながらも、彼女ははっきりと言った。
「バシル、馬鹿なことをしないで。レヴィアタンに勝てるわけがないじゃない」
「……そんなことはない」
「何を根拠にそんなことを言っているの？　無関係なヒューマンまで巻き込んであなたは……」
メリーナの言葉に、リーゼロッテは首を傾げた。
どうやら彼女は、リーゼロッテの正体を完全に見破っていたわけではないようだ。
バシルはそれでも、メリーナを説得しようと試みたが――
「それに、もし本当に倒してしまったら……〈世界樹〉が枯れてしまうかもしれないのよ？」
メリーナにそう指摘され、彼は続く言葉を呑み込んだ。

◇　◇

定期的に、若いハイエルフの娘を生け贄として捧げる儀式。
それによって、レヴィアタンは遥か昔から生き長らえ、〈世界樹〉を守護しているのだという。
さらには〈世界樹〉の下にある泉の水を常に浄化しており、〈世界樹〉はその水を糧にしてこそ命を保っていられるらしい。
つまりレヴィアタンを討つということは、〈世界樹〉が枯れるかもしれないことを意味していた。
これらは全て先祖達から伝わる話であり、何故レヴィアタンが生け贄を必要とするのかは分かっていない。
だがバシルが物心付いた頃に起こったある事件によって、少なくともレヴィアタンが水の浄化を行っているというのは真実だったと、ハイエルフ達は思い知ったのだ。
というのも、その頃ハイエルフの間で生け贄を捧げることに対する疑問の声が高まり、一度だけ儀式を行わなかったことがある。
レヴィアタンは、特に暴れることもなく姿を消した。だがそれにハイエルフ達が安堵したのも束の間、泉の水が日を追うごとに黒く濁っていったのだ。
それによって〈世界樹〉が枯れるのを恐れたハイエルフ達は、慌てて生け贄をレヴィアタンに捧げた。
すると、それを待っていたかのようにレヴィアタンが現れ、次の日から濁っていた水が急速に浄

化されていったのだ。
それ以来、生け贄の儀式に反対する者はいなくなった。
泉の水が濁れば〈世界樹〉が枯れるとは限らない。だが少なくともレヴィアタンが死ねば、泉の水が濁ることは間違いないと思われる。
それでも、バシルは今回の儀式を阻止したかった。
彼はたとえ〈世界樹〉が枯れてしまう事になろうとも、メリーナを失いたくなかったのである。
他のハイエルフからすれば、彼がしようとしている行為は暴挙といえるだろう。
もし実行したら彼は断罪され、誹りを受けるに違いない。
〈世界樹〉が枯れてしまったら、全てのハイエルフ達が路頭に迷うことになるのだから。
しかしバシルは他のどんなことよりも、メリーナの命を優先した。
リーゼロッテはそんな彼の性格を「魔族好み」だと評したのである。
だがそんなバシルを止めようとしているのは、彼が助けたい相手であるメリーナその人だった。
「もうやめて、バシル。私はあなたが罪人になる姿なんて見たくないの」
「……っ！　だったら――」
『一緒に聖域から逃げよう』……かな？」
「……」
口にしようとした言葉を先に言われ、黙り込んでしまうバシル。
最初は彼も、レヴィアタンを討つのではなく、メリーナを連れて逃げることを考えたらしい。

だが彼女は、生け贄になることをすでに受け入れてしまっており、バシルの言葉に耳を貸さなかったのだ。
「でも、私が逃げれば誰か他の人が生け贄になるわよね？　もしかしたら、選ばれるのは私の家族や友人かもしれない」
「……」
バシルは彼女の言葉に苦々しい表情を浮かべつつも、何も言うことが出来なかった。
自分は他の全てを捨てる覚悟をした。
だが、彼女にも同じ覚悟をしろとは言えない。
「私は家族や友達を助けたい。あなたが言うみたいに、全てを捨てて逃げるなんて私には出来ないよ……」
暗かったので、バシルからはメリーナの表情がよく見えなかった。
いや、彼は俯いており、彼女の顔を見ようともしていなかったのだ。
メリーナはバシルに歩み寄り、彼の頬を両手で包み込んで強引に顔を上げさせた。
自らの意志を、彼に示すために。
「ねぇ、バシル。私はもう覚悟が出来てるの。その上で、自分から望んで生け贄になるのよ。だから――」
――余計なことをしないで。
その言葉を聞き、バシルは力なく崩れ落ちた。

◇　◇

賢者のサークレットはリーゼロッテが想像していたよりも、ずっとシンプルなデザインのものだった。

だがよく見れば複雑な魔法陣が細かく刻み込まれており、多くの宝石で飾り立てるよりもよほど価値のある逸品だと分かる。

夜の闇を見通す目でそれを眺めながら、リーゼロッテはつまらなそうに呟いた。

「……思っていたより、骨のない男だったわね」

まだ夜が明けておらず、静まり返ったままのウルズを歩きながら、リーゼロッテは先程のことを思い出す。

メリーナの説得により、バシルは簡単に折れてしまった。

彼はお詫びとして賢者のサークレットこそ譲ってくれたものの、肝心のレヴィアタンを呼び出さずに終わったのだ。

だがリーゼロッテは、バシルやメリーナの事情なぞ知ったことではない。

彼女はこの地で知名度を上げることを、まだ諦めていなかった。

いっそ他の魔族がやっているように、大暴れして悪名を広めようかとも思ったのだが……

結局、リーゼロッテは自ら泉に潜ってレヴィアタンを探すことにした。

そうすれば、ハイエルフの数を無駄に減らすことなく悪名を広めることが出来ると考えたのだ。

神獣を殺せばウルズにはいられなくなるだろうが、賢者のサークレットを手に入れた今、もうここに用はない。

そういうわけで、バシルから賢者のサークレットをもらうために一度彼の家に戻ったリーゼロッテは、再び儀式の間へ向かっていた。

例の水場から泉に入り、レヴィアタンを探す心積もりである。

特に急ぐ必要もないので、彼女はゆっくりと歩きながら、道中で賢者のサークレットの効果を試してみることにした。

（バシルは、頭に被るだけで効果を発揮すると言っていたけれど……）

装備しただけで頭が良くなると言うのなら、何故そんなすごいものをバシルは身に着けていなかったのだろうか？

疑問を抱いたリーゼロッテは彼に尋ねてみた。

バシル曰く、両親から大事な家宝なので安易に被らないよう言いつけられていたのだとか。だがその両親も亡くなり、彼自身はそれほどサークレットに興味がないため、神獣討伐の報酬にしようと考えたそうだ。

リーゼロッテにはバシルが嘘をついているようにも思えず……結局、好奇心に負けて装備してみることにした。

未知の装備品をろくに調べもせず身に着けるなぞ、危険行為である。ミレイアがそばにいれば、

絶対に止められたであろう。
だが、この場にリーゼロッテの行動を咎める者はいない。ゆえに、彼女は何ら警戒することもなく賢者のサークレットを頭に被ってしまい――
その瞬間、リーゼロッテは自分の頭が急激に膨張したような錯覚を起こした。
それはまるで、厚く暗い雲に覆われていた空が、一気に晴れ渡るかのようだった。
今まではどちらかと言えば嫌いだった「考える」という行為に、快感さえ覚える。
賢者のサークレットによって劇的に聡明になったリーゼロッテは、既にこの魔道具の力を理解していた。
装備すれば賢くなるというのは本当だが、知識が増えるわけではなく、理解力や思考力が爆発的に上がるのだ。
残念ながら、それでは知力の評価は上がらない。だが、リーゼロッテは十分に有益な物を手に入れたと思った。
――が、その時リーゼロッテの頭の中に、妙な声が直接入り込んできた。
『好き。誰よりも好きじゃ。そなたを思うと、煮えたぎった溶岩よりも胸が熱くなるのじゃ。そなたがそばにおらぬと、まるで地上に降る雨のように――』
嫌な既視感を覚え、リーゼロッテはそっと賢者のサークレットを外した。
これほど有益な装備品を、何故誰も装備していなかったのか。その理由が、今はよく分かる。
恐らくは、これを装備している限り、ずっとこの恥ずかしいポエムを聞かされるハメになるのだ

立ち読みサンプルはここまで

ろう。
リーゼロッテはなんとなく、これの製作者が誰なのかを悟った。
（製作者は、賢者の書を作った者と同じよね……なら、これは誰に贈られたものなのかしら？）
バシルの家系に代々伝えられてきたという、賢者のサークレット。
普通に考えれば、バシルの先祖に贈られたのだろう。
だがリーゼロッテにはハイエルフについて一つ推測していることがあり、それが正しいとすれば、どうにも腑に落ちないのだ。
幾ら考えても答えは出ないまま、リーゼロッテは再び儀式の間に続く扉の近くまで来た。
彼女は一旦考えるのをやめ、前回と同じように物陰から扉付近を窺う。
バシルと来た時に昏倒させた男達はすでに目を覚ましており、他のハイエルフ達も集まって少し騒ぎになっていた。
出るときもメリーナと三人でこっそり出てきたので、リーゼロッテ達が侵入したことはバレていないはずである。
今回は同行者がいないため、リーゼロッテは【影中移動】というスキルを使い、影の中を通って移動することにした。
すでに内部の構造は把握しているので、今度は扉すら通らず直接中に侵入する。
外で騒ぎになっているくらいだから、中にもハイエルフ達がいるかもしれない。
そう思っていたのだが、儀式の間には誰もおらず、祭壇もそのままになっているようだ。